

三、四 雪舟筆山水圖

岡山

大原孫三郎氏藏

紙本淡彩 挂幅装 竪一・七・四寸（三・八寸七分）
横三・五・二寸（一・八寸六分）

（熊谷宣夫「大原家藏雪舟筆山水圖に就いて」参照）

五 椿山筆中戸祐喜像

神奈川

鈴木八重氏藏

絹本著色 挂幅装 竪一・〇・九寸（三・六寸六分）
横四・四・二寸（一・四寸六分）

一見もの堅い老武士の風貌をさながらに、寫照せる椿山得意の肖像畫中新たに發見せる一幀である。顔や其他の肉身はうす墨入の淡俗赭に淡墨ぼかしの陰影を施し、目の中に胡粉を點じ、目の周圍と鼻梁とに薄く胡粉を刷き、唇に薄

椿山筆中戸祐喜像落款（原寸）

い臙脂と淡朱とを置いてゐる。また額や瘦頬には細かい淡墨線を以て皺を描き、眉鬢の毛描中に胡粉の細筆を交へて、老顔を生けるが如く描出せるのみか、稍前屈みに端坐せる姿態が、いかにも生真面な一徹者の老武士をまのあたり見る如くで、その寫實的技法は眞に手に入つたものである。

衣服は簡素な、寧ろ柔軟なる線描をもて縁取り、衣は藍、下著の襟は草の汁、袴及び袴は淡墨、丸に酢漿草の定紋は外隈法にて白く抜いてゐる。脇差は刀身に焦墨、柄鮫に胡粉、柄頭と鐔に金泥を施すのみにて、すべてその描法は顔面を精寫せるに比して、極めて單簡である。

彼の寫象の畫法に於て、斯の如く陰影を施して寫實的立體感を表現せるは、彼の師崑山を通じての洋風畫の影響と認むべく、また顔面のみを精寫して衣服

以下は比較的簡素に描出せることも亦崑山に見る手法である。但し崑山の描ける肖像畫は針を以て刺す如き鋭い洞察の下に描寫されて、凜然たる畫格の人に逼るものあるに、本圖は然らず、柔軟なる筆致と澁い淡彩色とに成つて一種溫雅な畫品を藏してゐるものである。椿山作畫の特徴は即ち此點に存してゐると思ふ。

款記に壬寅春三月甲子寫弼とありて、その下に平弼の朱文瓢形印が捺せられてある。壬寅は即ち天保十三年にして、彼の師崑山が幽死せる翌春に當り、椿山四十二歳の作にかゝる。而して同年編纂の江戸現在廣益諸家人名錄に據れば當時彼は小石川水道町牛天神下に居住せるものゝ如くで、今所藏者の語るところによれば、本圖の主人公中戸祐喜は所藏者の祖先にして、椿山と同じく幕府直參の士にて、當時彼の近隣に居住してゐたと云ふ。（菅沼）

六、七 吳春筆孤鷺群禽圖

滋賀

上野新介氏藏

絹本淡彩 六曲屏風一雙 各竪一・六・四・五寸（五・八寸四分）
横三・六・五・四寸（一・丈二寸六分）

四條派の祖吳春の手腕を窺ふべき代表的作品として夙に著聞する一作である。堂々六曲屏一雙の大畫面に畫くは湖沼目睹の風物詩、氣格の大なる一面に又なか／＼に繊細なる趣致を藏める。

左隻には近景に枉屈する老柳數株を配し、その樹幹より簇出せる若枝に新葉の爽やかに風に靡ける様、水際近き灌木に棲む小禽の生趣又如實の趣きに富むが、右端に近く突如として水を離れ將に風に乗つて飛ばんとする鷺の姿は云ふ迄もなく此圖の眼目である。右隻は即ちその風とこの鷺の勢に應じて圖を構へたもので、時は秋、樹葉の半ば落ちた梢に留る群れ鳥は多く風に向つて立ち、飛び立つ鷺に向つて或は顧み或は叫び、或は羽撃く。この鳥とかの鷺と、かゝる著想は彼を待つ迄もなきこと乍ら、その呼吸ある構圖の妙に至つては、定に吳春の畫才にして始めて爲し得る所のものであらう。古畫に學んで遠景を省略